

府内城 天守復元考

三ツ股 正明

はじめに

府内城天守の復元は従来より数例行われてきているが、同城天守は寛保三年（一七四三）の火災により焼失し、以後再建されていない。従って当然のことながら幕末や明治期の古写真も存在せず、外観や内部構造等を詳しく伝える設計図も確認されていないことから、歴史的にも建築史的にも非常に困難なテーマであると言えるだろう。

このような資料の乏しい状況下において天守の復元が行われてきた訳であるが、その復元案は大別して二通りが考えられており、一方は現在までに伝わる教葉の絵図類に描かれた、天守の外観が最上層の入母屋屋根以外に全く破風を持たない層塔型天守案であり、もう一方は小野英治氏が提示された慶長初期の特徴を有した望楼型天守案である。

今回本稿において新しい復元案を提示する訳ではないが、要は天守の外観が絵図に描かれた通りの層塔型であったか、或いは慶長初期の特徴を有した望楼型であったかに集約されるであろう。そこで改めて両者の復元案についての比較、検討を交えながら見解ものべてみたいと思う。

一 天守の完成年代

府内城の築城は慶長二年（一五九七）に入部した福原直高によって開始され、早川長敏の代を経て、同六年に入部した竹中重

利による大改修の後、同十年七月に総構をもった城郭と城下町が完成したとされている。なお天守については「豊府聞書」³⁾に、同年(慶長七年)三月建天守及楼櫓、於是殿宇巍々聳高、楼閣峨々連屏とあり、竹中重利入部後の大改修による慶長七年三月に完成したことが窺われる。

しかし、この記述内容をして年代が事実かどうかの確認がないので、まず慶長七年という年代から検討する必要がある。というのは後章で述べる城絵図との関連があるためで、府内城を描いた絵図はその天守を外観四層、最上層の入母屋破風以外に屋根破風を全く持たず、かつ二層目から順次遁滅していく完全な層塔型としている。

従来⁴⁾の城郭研究では、天守建築は望楼型から層塔型へと発達し、層塔型天守が出現するのは慶長年間(一五九六—一六一五)の中期から後半にかけての間であるとされていることから、仮に府内城天守の完成が慶長七年で、なおかつ完全な層塔型であったとしたら、同天守が層塔型の初例となり、層塔型天守の出現が十年前後遡ることとなる。

望楼型と層塔型の関係については次章において述べることとして、初めに天守完成年代の検討から進めてみることにする。先の「豊府聞書」をはじめとする数種の史料では一様に天守完成を慶長七年と伝えていることから、文献上では慶長七年であった可能性が高いと現段階では考えられる。

次に考古学的分野に目を移すと、実に興味深い調査結果が得られている。それは平成三年に大分県教育委員会が実施した府内城三ノ丸遺跡の発掘調査であり、天守完成年代を考える上で三ノ丸の調査結果では直接的な参考にはならないが、府内城の築城過程を知る上では重要な手がかりとなり得るので少々触れてみることにする。

同調査では土坑出土遺物の年代を基本に、遺構の所属年代を7期8小期に大別している。中でもI期に所属するSK20及びSK23という二つの遺構からは、十六世紀末から十七世紀初頭に位置付けられる陶磁器類、焼塩壺・土師質土器・肥前唐津系陶器(皿及び壺)などの出土遺物が報告されており、この結果から同調査報告書では次のように述べられている。

「「雉城雑誌」等の記載を参照すれば、慶長四年に福原直高による三ノ丸屋敷が完成、同七年に竹中重利による三ノ丸堀の

遺構の年代		主要関連事項
1250	0 SK30	
1600	I SK20 SK23	文禄2年(1593) 早川長城入部 慶長2年(1597) 福原直高入部 慶長4年(1599) 早川長城入部 慶長6年(1601) 竹中重利入部
	II SK29 SK32 SK35 SK36	寛永11年(1634) 日種野吉明入部
1650	SK31 SK32	万治元年(1658) 松平忠昭入部 福寿院建立 延宝4年(1676) 木村萬入屋敷管えとなる
1700		

表1 遺構年代表「府内城三ノ丸遺跡報告書」より(ただし一部省略)

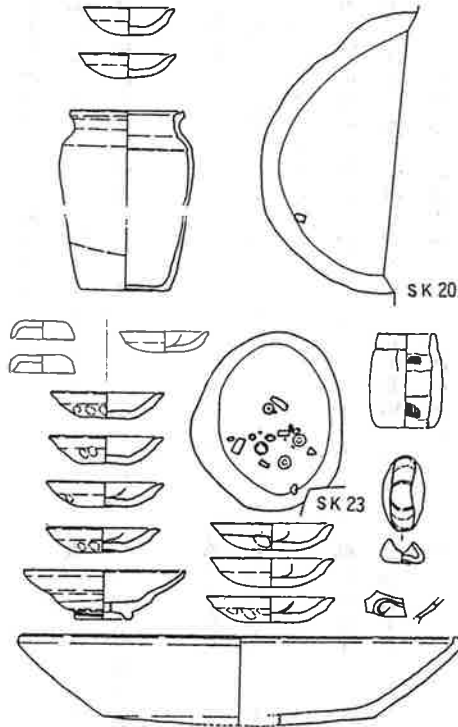


図1 遺構及び遺物実測図(遺構は1/60、遺物は1/6)「府内城三ノ丸遺跡報告書」より

掘削、(中略)史料による限り、府内城三ノ丸の築造は十七世紀初頭までになされていたことになる。(中略)少なくとも出土遺物の年代は文献にも見える府内城三ノ丸の築造期に一致している。(中略)このことは史料にみえる福原直高・竹中重利の府内城三ノ丸築造を考古学的に傍証する史料ともなり得るのである。(5)

ところがこの時期(I期)に該当する遺構が二つのみで、出土遺物も必ずしも多いとは言えないことからすると、一概に正しい年代を示しているとは言いがたく、報告書の記載にあるように傍証の域を出ない感があるが、文献的にも考古資料的にも府内城三ノ丸の築造時期が関ヶ原戦の前後であったことが推察され、文献に伝える年代はほぼ正しいと考えることが出来るのではないだろうか。

残念ながら天守周辺や本丸地域の発掘調査がまだ実施されておらず、天守完成年代の手がかりとなる考古資料も得られていないが、三ノ丸の調査結果から類推して、文献が伝える慶長七年天守完成もほぼ間違いないと思われる。今後の発掘調査に期待したい。

二 望楼型天守と層塔型天守

前章でも触れたが、従来の研究では天守建築は望楼型から層塔型へと発達し、層塔型の出現は慶長中期から後半の間とされていた。

年代	望楼型	層塔型
慶長2年	岡山城	
4年	広島城	
6年	熊本城、高知城	
11年	彦根城	
12年	松江城	
13年	萩城	
14年	姫路城	
15年		丹波亀山城、小倉城
17年		名古屋城
元和2年		津山城
8年		備後福山城
9年		江戸城
寛永3年		大坂城(幕府による)
万治3年		丸亀城
寛文5年		宇和島城

表2 天守の変遷 (主要城郭のみ)

天守の起源や名称については城郭専門書等に詳しいので本稿では割愛するが、表2にまとめた如く望楼型と層塔型の変遷を見る限り従来の説は間違いないように思われる。しかし慶長七年完成と考えられる府内城天守が、後年幕府へ提出した絵図の中に層塔型(しかも最上層の入母屋破風以外に屋根破風を有せず、二層目からは順次遞減している)として描かれている事実からすると、もし絵図の内容が正しいければ、層塔型天守の出現が従来の説より十年前後早まるのではないかと推測されるのも不思議ではない。そこで本章では層塔型天守の起源と発達について考えることとする。

層塔型天守の起源が、いつ、どの城であったかという問題はすでに戦前から研究が行われており、特に藤岡通夫と城戸久の両氏により建築史の分野から進められている。

藤岡氏は元和二年（一六一六）に完成したとされる津山城天守を層塔型の先駆的なものとし、同八年に完成した備後福山城天守において層塔型が完成の域に達したと考え、城戸氏は慶長十五年完成の丹波亀山城天守を層塔型天守の初源としている。⁽⁷⁾なお今日においても内藤昌氏や三浦正幸氏も丹波亀山城天守を層塔型の初例として挙げ、特に三浦氏は藤堂高虎と層塔型天守に深い結びつきがあると言及しているが、本稿では省略する。⁽⁸⁾

この他にも松本城天守や旧岐阜城天守を転用した加納城御三階櫓に層塔型天守の起源を求め意見もあるが、松本城天守の場合は解体修理の結果から、本来望楼型であった天守を寛永年間（一六二四―一六四四）の戸田直政の代に改築された形跡が認められている。⁽⁹⁾また加納城御三階櫓についてはその立面図が伝わっており、一見すると現存の宇和島城天守と全く同じ屋根構成をした層塔型のように描かれているが、その描法はかなり粗雑で、覚書程度に描かれている可能性がある。実際に層塔型であったかどうかは判断し難い。（なお御三階櫓は享保十三年（一七二八）に焼失し、その際、忘れられないうちに記録されたのがこの立面図であるという⁽¹⁰⁾）しかし、この御三階櫓も完成が慶長八年、つまり府内城天守完成の翌年であったから、仮に府内城天守が層塔型であるとしたら加納御三階櫓が層塔型の初例とは考えられなくなる。

次に層塔型天守の屋根破風についても考えてみたい。望楼型天守の屋根破風は構造上の問題から生じるものであるが、層塔型のそれは天守の構造とは無関係であって、千鳥破風や唐破風といった屋根破風は単なる装飾的なもの、或いは権威付けの意味を持った程度にしか捉えられない。すなわち層塔型天守においては最上層以外に屋根破風を付けなくても一向に構わないのである。そこで次章において詳述する正保城絵図において、府内城天守と同様に無破風層塔型に描かれた城を挙げると、丹波亀山城・津山城・丸亀城・小倉城・日出城・八代城がある。このうち古写真により絵図通りの無破風層塔型と確認できるのは丹波亀山城と津山城のみであって、このタイプの天守が実際存在したことも証明される。（丸亀城天守は現存するが、絵図上では屋根破風が省略されている）なお小倉城天守は津山城天守が小倉城天守を模範にして建てられたと伝えられているので、無破風層塔型として考えてもよいであろう。日出城については小野英治氏が小倉城との関連を指摘しているが、古写真などに

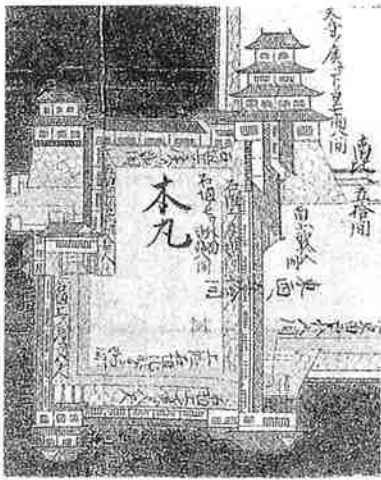


図2 正保図(部分)(内閣文庫所蔵)
※上が北

より確認できないので詳細は不明である。最後に八代城では松井家所蔵の「八代城古絵図面」に望楼型天守が描かれており、正保城絵図において屋根破風を省略した可能性があると考えられている⁽¹²⁾。

このように層塔型天守には構造上屋根破風が必要ないので、実際に無破風の天守も存在したことが明らかになり、その城の正保城絵図も真実を描いていると証明されるのであるが、他の層塔型天守や望楼型天守を持つ城の正保城絵図も真実を描いているのかという疑問が生じる。それは次章において検討したい。

結局表2に示したように、現在確認できる層塔型の初例は慶長十五年完成の丹波亀山城天守と言わざるを得ず、府内城天守完成の八年も後のことであることと、丹波亀山城天守以前に層塔型天守が一つもその存在が認められない結果から考えると、府内城天守が層塔型であったとするには無理があるように思う。

三 城絵図と天守

層塔型天守復元案の大きな根拠となっているのが城絵図であることは先に述べた通りであるが、次にその城絵図自体について若干の検討を加えてみることにする。

府内城天守を描いていた絵図は数葉残されているが、年代等が判明し、幕府という公的機関へ提出した図面として資料的価値が高いと考えられるのは正保元年(一六四四)の「豊後府内城之絵図」^(図2)(所謂正保城絵図と称されるもので以下本稿においては正保図とする)及び寛保三年(一七四三)の「豊後国府内城絵図」^(図3)(以下本稿においては寛保図とする)の二点であろう。

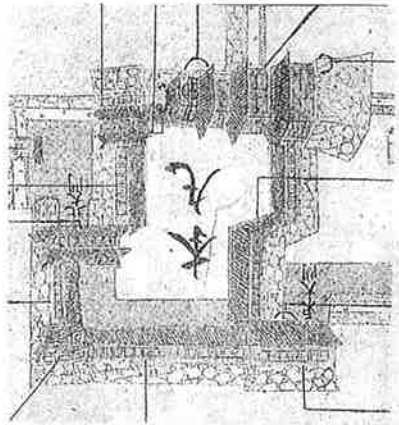


図3 寛保図(部分)(大分県立図書館所蔵)
※上が北

正保図は正保元年に幕府が三十一箇国・百三名の大名に対し図絵図ともに作成・提出を命じたもので、その作成基準も示されていたようである。天守に関する項目だけを挙げてみると「多久家有之候御書類写 十五」では次のように記されている。

一、天守之事

天守ヲ絵ニ書、いくかいと有之儀、并石垣之高さ有所迄、無相違様ニ
絵図可仕由之事

また「玄徳公済美録」巻一六⁽¹⁵⁾においては、

一 矢倉并門・石垣何も念を入絵ニ書候事

一天主之台石垣をも絵ニ書、其外石垣之分絵書申候、惣構・矢蔵下石垣をも絵書候事
となつている。いずれも「相違無く」や「念を入れ」といった具合にかなり詳細かつ正確に描くように要求されていたことが
窺える。

『豊後府内城』ではこの点に注目しており、正保図に描かれた天守は想像を加えることのない見たままの姿であると考え、
正保図の信用度を高いものと位置付けている。確かに正保図は後述する寛保図や他の絵図類に比べ精巧さでは群を抜いた図面
ではあるが、果たしてどこまで正確で信用度の高いものとして捉えることが出来るのであろうか。特に天守建築に焦点を当て
て考えてみたい。

図4は正保図に描かれた天守と、幕末から明治期に撮影された同天守の古写真との比較である。高知城と大洲城の天守は古
写真から外観四層であったことが確認されるが、正保図では外観三層として描かれている。さらに高知城天守では第三層(正
保図では第二層)の屋根破風の一部に違いが認められ、最上階の回縁高欄が省略されている。また大洲城天守では各層の千鳥


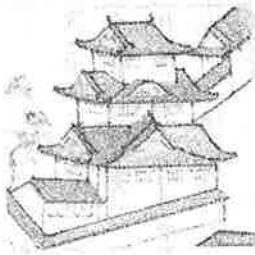

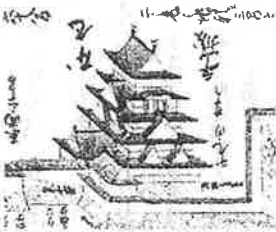

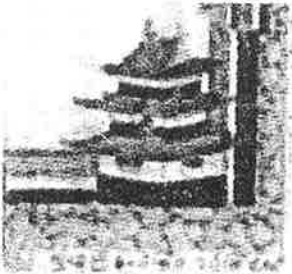
古 写 真	正 保 図	
		高 知 城
		松 江 城
		大 洲 城

図4 正保図と古写真による天守の比較(正保図は内閣文庫所蔵)
(ただし高知城天守は現存するので、現在の写真を用いている)

破風や唐破風が省略されて描かれている。逆に松江城天守の場合は外観四層の望楼型が外観五層の層塔型となっており、存在しない千鳥破風が余計に描き加えられている。

これらの天守以外でも丸亀城や丸岡城などの正保図においても同様の描写表現が確認され、先に紹介した絵図作成基準の「相違無く」や「念を入れ」といった指示から掛け離れた図面として仕上がったものが少なくない。反対に天守の外観をほぼ正確に描いており、なおかつ望楼型と判別出来るのは岡山城の正保図くらいで、実物は望楼型天守であるにもかかわらず図面上では例に挙げた松江城の如く層塔型天守として描かれている場合が少なくない。(他に広島城・大垣城・丸岡城など)

この結果から正保図において天守建築には屋根破風や回縁高欄の簡略化・省略化といった事実から、特に正確な描写が求められていなかったと解すことが出来るのではないだろうか。

幕府が正保図の作成・提出を命じた意義を考えると、諸大名の支配と幕藩体制の強化は勿論であるが、幕府が城絵図という大名にとって最高の軍事機密を提出させることによって有事の際に軍事的優位を保つ為の好材料としたことは容易に想像出来るであろう。つまり端的に示せば、正保図に求められていたものはその城の「縄張」であって、天守や櫓といった建築物は縄張上の位置と規模がわかる程度で差し支えなかったと考えられるのである。なお紙面の都合上割愛したが、先の絵図作成基準には石垣・土塁・堀・惣構といった縄張りに直結する普請(土木工事)については、その高さや広さ、深さなどの具体的な記載が要求されているが、天守や櫓等の作事(建築工事)部分には普請ほど詳細な記載が求められていないことから、幕府がいはに縄張関係について注意していたかが窺われ、それは武家諸法度の内容を踏襲したものと推察される。因みに寛永十二年(一六三五)法度では、

一新規之城郭構營堅禁止之、居城之隄壘石壁以下敗壞之時、達奉行所、可受其旨也、櫓扉門等之分者、如先規可修補事、とあり、普請は届出制で作事は特に届出は必要なかったのである。

以上のように正保図に求められていたのは縄張りであって、その中に描かれた天守建築は矢守一彦氏や松岡利郎氏が指摘し

ているように、極めて絵画的描法や鳥瞰的構図が用いられており、実際の景観を忠実に描いた例は非常に少ない。よって『豊後府内城』に記された如く、幕府へ提出する絵図であるから疑いを持たれるようない加減なものではないと解釈するのは、正保図に描かれた全ての内容には適合しないのではなからうか。

さて、正保図以外にも天守を描いた絵図として寛保図が挙げられ、この絵図は寛保三年の火災後、幕府へ提出した居城修築伺図の控えであり、精度の点から見れば正保図に劣るが、天守の外観を知る上で興味深いものがある。

正保図と寛保図に描かれた天守を比較してみると、両者とも外観四層の無破風層塔型天守であり、最上階に華頭窓を描いている点は共通しているが、寛保図の天守には最上階に高欄が描き加えられ、図面上では天守東面及び南面を描き、最上層の入母屋破風の妻が南向きとして描き取れる。

なお小野英治氏の望楼型天守復元案は、この寛保図に描かれた天守の最上層入母屋破風の妻が南方に向けられている点と、府内絵図(慶長拾年十一月と書かれた付箋があるが、年代と記載内容の一部が一致しない)に記された天守の平面寸法より求められている。しかし寛保図をよく観察すると、一見図面上では天守の東及び南面を描いているように捉えられるが、一階から三階までの窓が東西に二枚、南面が一枚として描かれていることに気付く。府内城天守一階平面の寸法は正保図では南北七間、東西八間と記され(府内絵図も同じ寸法となっている)、寛保図では南北七間、東西八間三尺と記されているから窓が二枚なのは南及び北面、一枚なのは東及び西面と考えるのが自然ではないだろうか。従って寛保図に描かれた天守は北面と東面で、最上層入母屋破風の妻の向きも東であると筆者は推測している。因みに正保図の天守はほぼ左右対称に描かれている(窓も左右同数)ので、最上層入母屋破風の妻は図面上では東向きであるが特定は出来ないばかりか、南北七間、東西八間の記載内容とも矛盾している。

また寛保図の天守に描かれている高欄については、その存在に疑問を呈する意見もあるようだが、正保図で例に挙げた高知城天守などのように高欄を省略した場合もあるので、府内城の正保図においても高欄が省略されて描かれている可能性が高い

と考えられる。

以上、城絵図と天守の関係を正保図を中心に述べてきたが、正保図に求められていたのはあくまで「縄張」であつたから絵図に描かれた内容が全く正しいと解釈するのは好ましいことではないように思う。特に天守建築の描写には顕著であるから、古写真で比較、確認が出来ない天守の復元を考える際には注意が必要であろう。

四 府内城天守の構成・構造

最後に天守の構成及び構造について考察することとする。天守自体はその南面及び西面に付櫓(府内城では取付櫓と称している)を有した複合式であるが、天守西方の二重櫓(この櫓が事実上の小天守に相当すると考えられる⁽²⁰⁾)、その南方に北大櫓門と二重櫓、そして天守南面の取付櫓から続く平櫓と東大櫓門、これらを渡櫓で連結させ天守曲輪を構成する連立式を兼ね備えた複合連立式となっている。なお連立式の完成型として姫路城や松山城などが挙げられるが、府内城の場合は天守自体が古い様式の複合式であるので、連立式が完成する前の過度期段階の構成であると考えられる。また天守には直接の入口を設けておらず、東大櫓門から渡櫓・平櫓・取付櫓を経由して登るか、或いは天守西方の二重櫓(小天守)から渡櫓、西面取付櫓を経て登るようになっており、かなり実戦を想定した構成とも見ることが出来るであろう。

余談になるが、府内城天守とはほぼ同様の構成をした天守として慶長四年頃完成の広島城天守がある。同天守にも府内城のそれと非常によく似た付櫓(府内城では取付櫓)を南面と東面に有し、渡櫓でそれぞれの方向に小天守を連結した複合連結式となっている。ただし府内城のように天守曲輪を形成しておらず、両城の関連性も確認できないが、年代的にも近く、天守構成の発達を見る上で実に興味深い。(因みに広島城天守は望楼型である)

ところで本稿の冒頭でも述べたように、城絵図以外に府内城天守の外観やその構造を伝える設計図の類は現在のところ確認されていないが、内部の様子を伝える史料は存在する。明暦二年(一六五六)五月十五日の日付が入った「御城諸道具改帳」⁽²¹⁾が

それで、内容を調べると天守内部は「天守上之重」、「天守三重目」、「天守二重目」、「天守下之重」に区分されており、四階であったことが確認される。また各階には武器・武具類が保管されていたことも窺えるのだが、ここで各階に収納された武器・武具類の数量に注目したい。

収納物の大小にもよるので一概には言えないのだが、単純計算すると「下之重」が約七〇パーセント、「二重目」が約二〇パーセント、「三重目」が約八パーセント、そして「上之重」が約二パーセントという結果になった。特筆すべきは「下之重」（一階と「二重目」（二階）の収納量の極端な差であり、収納物の大小を考慮に入れてもこの差ははげしく、一階平面と二階平面の床面積も同等の較差があると推測しても不思議ではない。

つまり城絵図に描かれた通りの二層目から順次通減する層塔型天守であったならば、この結果は得られ難く、考えるとすれば最下層は大入母屋破風を有し、「二重目」（二階）平面は大入母屋の屋根裏にあたり、その上に「三重目」、「上之重」を載せた望楼型天守とするのが自然であろう。

おわりに

以上各方面から府内城天守の復元について考えてきた。その結果をまとめると次のようになる。

- (1) 文献の記述年代と考古資料年代の一致による天守完成が慶長七年であると推測されること（ただし文献と考古資料はいずれも三ノ丸に関するもので、断定はできない）。
- (2) 正保図をはじめとする城絵図では屋根破風を省略して描いた可能性が高いこと。
- (3) 天守に保管された武器・武具類の数量からみて、一階と二階の数量の差が非常に大きいこと。つまり最下層は大入母屋破風を有し、二階がその屋根裏と考えられる。

(4) 最上階には華頭窓が存在し（正保図と寛保図に共通する）、また寛保図から回縁高欄があったのではないかと推察される

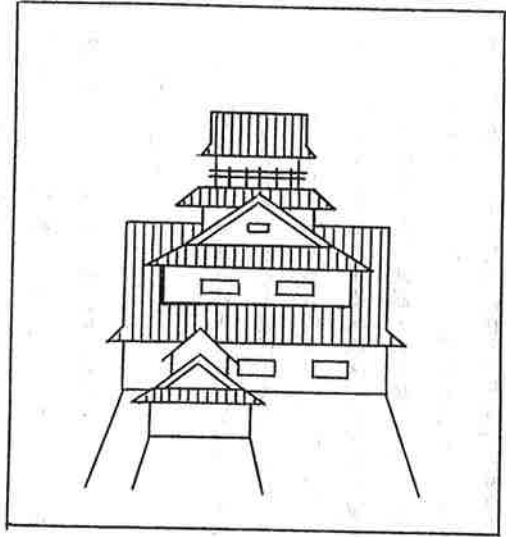


図5 筆者案の府内城天守復元略図(南面)

こと。

よってこれらの結果を総合すると、府内城天守が屋根破風を持たない二層目から順次通減する完全な層塔型であったとは考えられず、最下層に大入母屋破風を有し、その上に二層目以高を載せ、最上階に回縁高欄を巡らせた望楼型であると言えるのではないだろうか。

なお本稿のはじめに、新たな復元案を提示することはないと書いたが、念のため簡単な略図も描いてみた。正式な復元案は次の機会に改めて考えてみたい。論じたりない部分があったり、資料不足といった点は否めないが、一応今回はここで終わることとする。今後の発掘調査や新史料の発見に期待したい。

註

(1) 層塔型天守については『復元大系日本の城』(8)『櫓ぎょうせい(一九九二)における北野隆の復元案や、『豊後府内城』大分市歴史資料館第14回特別展「城のある風景」図録(一九九五)においても層塔型天守復元案が掲載されている。

(2) 小野英治「豊後府内城天守について」『大分縣地方史』一六三(一九九六)

(3) 大分県立図書館所蔵

(4) 『雉城雜誌』、『豊城世譜』など

(5) 『府内城三ノ丸遺跡』―大分県共同庁舎(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書― 大分県教育委員会 一九九三年三月三十一日

(6) 藤岡通夫「層塔式天守の一考察」 建築学会論文集第二九号 一九四三年五月

(7) 城戸久「丹波亀山城天守考」 建築学会論文集第三一号 一九四四年四月

(8) 内藤昌「文化財講座 日本 of 建築 4 近世 I」 第一法規出版 一九七六年 三浦正幸『復元体系 日本 of 城 9』 ぎょうせい 一九九三年

(9) 『復元図譜 日本 of 城』 理工学社 一九九二年

(10) 大竹正芳「天守建築の類型と系譜―屋根の構成による天守の分類―」 城郭史研究一四号 一九九四年

(11) 小野英治「豊後日出城の研究」 城郭六一― 一九六四年

(12) 『名城の「天守」総覧』 学習研究社 一九九四年

(13) 小和田哲男「近世初期城下町絵図の一考察―いわゆる「正保年間」絵図について―」 地方史研究八八号 一九六七年において正保図の提出は全国の各大名に命じられたとされている。

(14) 矢守一彦「幕府へ提出の城下絵図について」 待兼山論叢日本学篇一三三号 一九七九年 所引

(15) 『広島県史 近世史料編 III』 一九七三年

(16) 第14回特別展「城のある風景」 図録 大分市歴史資料館 一九九五年

(17) 矢守氏については(14)に同じ。松岡利郎「城絵図の種類と目的」『名城絵図集成 東日本之巻』解説 小学館 一九八六年

(18)(19) (16)に同じ。

(20) 本丸内の他の櫓に比べて一階平面の規模が大きい(慶長図では五間×六間二尺、寛保図では五間四方)ことから推測する。

(21) 大分県立図書館所蔵

※図2及び図4の正保図については、内閣文庫の許可のもと、『名城絵図集成 西日本之巻』小学館一九八六年より転載し、図3の寛保図は、大分県立図書館の許可のもと、註(16)の図録より転載した。

なお図4の写真については、高知城天守は現存するので、現在の写真を用いており、松江城、大洲城天守の古写真は『城郭古写真資料集成 西国編』西ヶ谷恭弘編集 理工学社 一九九五年より転載した。